

今週の為替相場見通し(2024年12月9日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		148.65 ~ 151.23	150.04	147.00 ~ 152.00
ユーロ	(ドル)		1.0462 ~ 1.0630	1.0565	1.0350 ~ 1.0650
(1ユーロ=)	(円)		156.19 ~ 159.48	158.43	156.00 ~ 160.00
英ポンド	(ドル)		1.2619 ~ 1.2810	1.2741	1.2500 ~ 1.3100
(1英ポンド=)	(円)	*	188.09 ~ 192.37	191.17	185.00 ~ 195.00
豪ドル	(ドル)		0.6373 ~ 0.6527	0.6390	0.6300 ~ 0.6500
(1豪ドル=)	(円)	*	95.52 ~ 98.02	95.87	93.00 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 152.00 円

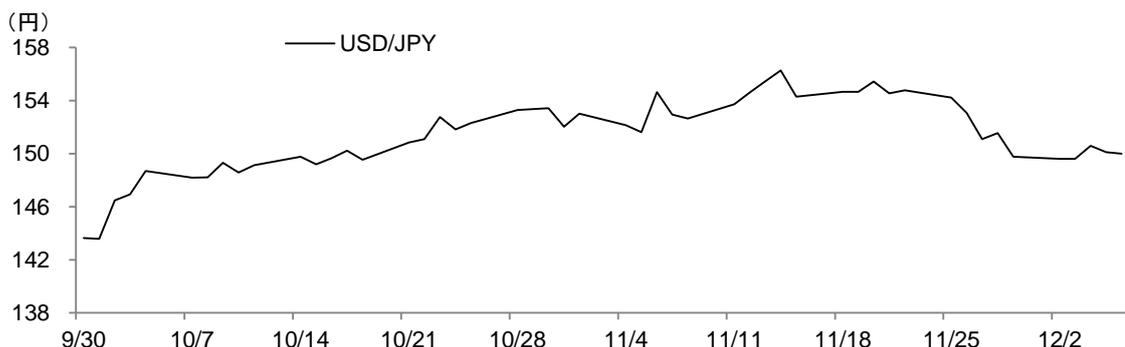
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は150円を挟み上値重く推移。週初2日、149.86円でオープンしたドル/円は150円台後半まで上昇も、海外時間には米金利低下やウォラーFRB理事によるハト派発言が重しとなり、149円台後半へ下落。3日、ドル/円は海外時間に、米金利続落や韓国での非常戒厳宣言を受けたリスク回避の円買いから一時週安値となる148.65円まで急落。その後米経済指標の強い結果を受け、149円台半ばへ値を戻す。4日、ドル/円は日銀の利上げ観測後退等を背景に堅調推移。海外時間には、一時週高値となる151.23円まで続伸。米経済指標が予想を下回りり安となるも、その後のパウエルFRB議長のタカ派発言から150円台半ばに値を戻した。5日、ドル/円は中村日銀審議委員のタカ派発言を受けて年内利上げ観測が再燃し、150円を割り込む。海外時間にも上値は重く150円ちょうどを中心に推移。6日、ポジション調整の動きからじり高に推移。海外時間に発表された米経済指標の結果が強弱入り交じったことで149円台半ばを挟み上下するも、その後はドル売りも一服し150円付近で越週した。

今週のドル/円は神経質な展開を予想。本邦では先月29日に発表された11月CPIの堅調な結果を受け、日銀による年内利上げ観測が高まっていたものの、先週4日の年内利上げ見送りを示唆する報道を受け、一時的に後退。しかし5日にはハト派で知られる中村日銀審議委員による「利上げに反対している訳ではない」との発言から、年内利上げ観測が再浮上している。他方、米国では先週末6日に米11月雇用統計の結果が公表された。失業率が上昇した一方、賃金の伸びは予想を上回り、さらにハリケーン等の影響で前月に急減速していた非農業部門雇用者数は回復を見せ、9月、10月分も上方修正された。非農業部門雇用者数の3か月平均は+17万3000人増となったことで、今年に入って見られた堅調なペースからは鈍化しているものの、これらのデータは労働市場が減速しつつも米国経済が底堅いことを示し、12月の利下げ実施を後押しする材料となったと言えよう。このような状況下、今週は本邦で9日(月)7~9月期GDP確報値、10月国際収支、13日(金)10~12月期日銀短観、米国では、11日(水)米11月消費者物価指数(CPI)、12日(木)米11月生産者物価指数(PPI)の発表を控える。これらの指標結果によって日米金融政策の方向性が見極められ、市場の思惑が相応に反映されることで、ドル/円は先週以上の値幅が出る展開も想定しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/2~12/6)の値動き: 安値 148.65 円 高値 151.23 円 終値 150.04 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0350 ~ 1.0650 156.00 ~ 160.00 円

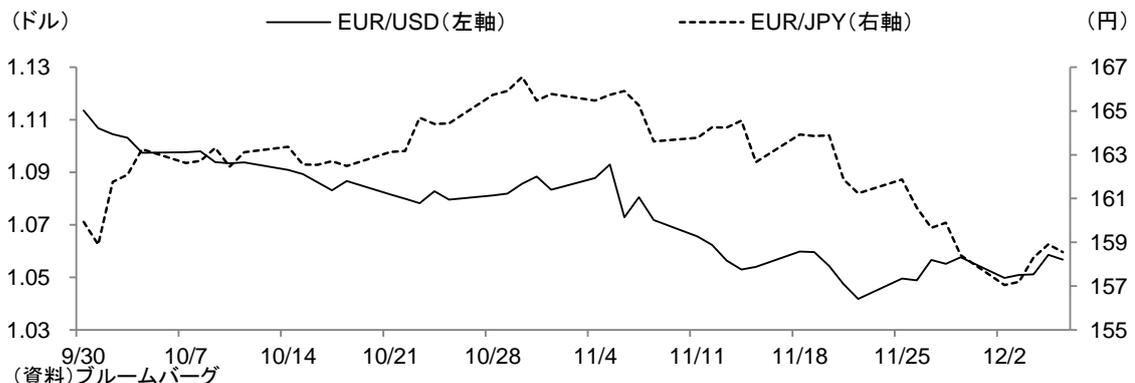
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、軟調に推移する場面も見られたが、週末にはかけては値を戻す展開となった。週初は1.05台半ばでスタート。フランス政治に対する先行き不透明感が嫌気され、安全資産買いの流れが優勢の中、独金利の低下も相まって軟調な展開となり、一時1.04台半ばまで下落する場面が見られた。週半ばにかけては目立った材料がない中で、概ね1.05台前半での方向感に乏しい値動きが続く。4日には韓国における戒厳令発布によって市場全体にリスクオフの雰囲気が強まると、再び1.04台まで下落。ただ、韓国の政治的混乱も一晩で収束に向かい欧州株や独金利が上昇に転じるとユーロ/ドルも持ち直す値動きを見せた。5日に公表された独10月製造業受注が市場予想を上回る結果になると、ドイツ景気に対する悲観的な見方が後退する中で、独金利は上昇。加えて、フランス政治に対する不透明感も一服するとユーロ買いが優勢な値動きとなった。6日は米11月雇用統計の公表を控える中、米国時間までは方向感に乏しい展開。米雇用統計公表後は、ドル売り優勢となり1.06台前半まで上昇する場面が見られた。もっとも、ユーロ買いの追加的な材料がないなか、ドル売りも長くは続かず、結局は1.05台半ばにて週末を迎えた。

今週のユーロドル相場は週後半にかけて軟調な推移になると予想する。週前半については12日(木)にECB政策理事会を控えているだけに様子見姿勢が広がることで、1.05台半ばを中心とした狭いレンジでの方向感に乏しい展開になるだろう。一方で、今会合での追加利下げの実施が確実視されているECB政策理事会以降については軟調な推移になる。ユーロ圏の大黒柱であるドイツでは基幹産業である製造業を中心に先行きに対する不透明感が一段と強くなっている状況下、連立政権が崩壊するなど政治的にも不安定な環境にある。加えて、ドイツと並ぶ大国であるフランスでも政治不安が広がっている。こうした状況下においてECBとしては、景気に対してより慎重な姿勢を示すことを強いられる可能性が高いだけに、ECB政策理事会の声明文やラガルドECB総裁の記者会見にてハト派的な情報発信が行われることをきっかけとして、ユーロは軟調な推移を次第に強えられる展開になる。12日(木)ECB政策理事会以外の注目材料としては、13日(金)に独10月貿易収支、ユーロ圏10月鉱工業生産などの公表が控えている。結果によっては、為替相場にも大きな影響を与える可能性があるだけに注意を払いたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/2~12/6)の値動き: (対ドル) 安値 1.0462 高値 1.0630 終値 1.0565
(対円) 安値 156.19 高値 159.48 終値 158.43



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.3100 185.00 ~ 195.00 円

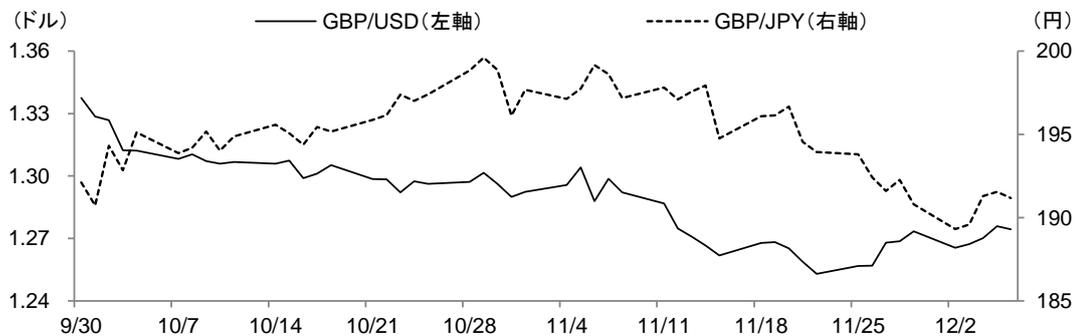
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は、若干のポンド高となった。週初は仏政治不安の影響かユーロ売りにつられて英ポンドは下落し、その後発表された米11月ISM製造業景況指数が市場予想を上回ったことで英ポンド売りが加速した。翌3日は、前日からの反発と予想を上振れる米10月JOLTS求人件数の結果によって上下し方向感のない推移となった。4日はベイリー英中銀総裁より「インフレが想定以上に速く下落した。来年は4回の利下げを見る」等のハト派発言が出てポンド/ドルの重しとなる。その後、米11月ISM非製造業景況指数が予想を大きく下回り、ドル売りに転じてポンド高で引けた。6日は、米11月雇用統計が発表され、失業率が予想を上回ったことを受けて12月FOMCでの据え置きの見方が後退、全体的なドル売りで反応。その後、米12月ミシガン大学消費者マインド(速報)が予想を上回り、同時に対ドルでユーロがテクニカルの重要なサポートを割り込んだことで、英ポンドも引きずられる形で弱含んだ。

今週は、FOMCを翌週に控えて方向感ない動きを想定。米経済指標では、FOMC前最後の米11月CPIが発表される。前回の米10月CPIではダウンサイドに歪んでいた市場予想とインラインとなり、リスクオンで反応したことが思い出される。FRBメンバーのハト派発言もあり、スワップ市場では利下げの織り込みが進んでいることを考えれば、前回のように内容が強含むものではないことを確認してドル売りになる展開が想定できる。英ポンドも同じく翌週に政策金利発表を控えている。英経済指標では特段大きなものはないが、英10月月次GDPや英10月消費者信頼感指数が発表される。とは言え、市場の意識は来年の織り込みに向かっており、現状は新予算案の影響などを見定める待ちの期間という認識。したがって、大きなサプライズがなければ影響は少なく、週を通してドル主導の動きとなる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/2~12/6)の値動き: (対ドル) 安値 1.2619 高値 1.2810 終値 1.2741
(対円) 安値 188.09 高値 192.37 終値 191.17



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6300 ~ 0.6500 93.00 ~ 98.00 円

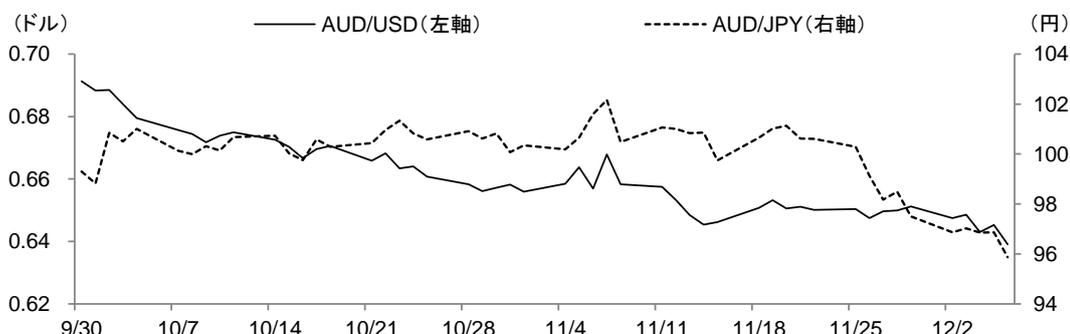
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

豪ドルは週初に高値となる0.6527を付けた後、値を切り下げる展開となった。週初豪ドルは0.6502でオープン後、米11月ISM製造業景況指数が市場予想を上回ったこと背景に0.64台半ばまで下落も、ウォーラーFRB理事のハト派発言に0.64台後半へ反発した。3日、豪ドルは人民元が1年ぶり安値を付けたことや米10月JOLT求人が市場予想を上回ったことを受け0.64台半ばまで下落。引けにかけてはS&Pが再び最高値更新をする中、小幅に買い戻されて0.64台後半で引けた。4日、豪ドルは豪7~9月期GDPが市場予想を大きく下振れたことを受け、RBAの利下げ開始前倒し期待が高まると豪金利低下に豪ドルは0.64台割れまで一時下落。NY時間に発表された米11月ISM非製造業指数が3か月ぶり低水準となったことを受け0.64台前半を回復して引けた。5日、注目される米11月雇用統計の発表を翌日に控え、ポジション調整からドル売りが膨らむと、豪ドルは0.64台半ばまで上昇して引けた。6日、米経済指標発表前は0.64台前半まで軟化し上値重く推移。注目の米11月雇用統計では、非農業部門雇用者数が市場予想を上回ったものの、失業率が予想以上に悪化したことを背景に豪ドルは0.64台半ばまで上昇。ただし、米11月平均時給が市場予想を上振れたことやその後発表された米12月ミシガン大学1年期待インフレ率が予想以上に伸びを見せたことを受けて下値を追う展開となり週安値の0.6373まで下落。その後、小幅買い戻されて0.6390で越週した。

今週の豪ドルはRBA会合次第で年初来安値を探る展開を予想する。9日(月)に中11月消費者物価指数、10日(火)にRBA会合、11日(水)に米11月消費者物価指数のほか、12日(木)に豪11月雇用統計が予定されている。豪州の金融政策に関して前回11月会合では引き続き基調的インフレ率の高さやインフレ上振れリスクについて言及されタカ派姿勢が堅持された。しかし、先に発表された豪7~9月期GDPでは市場予想を大きく下振れ、2020年終盤以来の低成長となっている。内訳をみても減税等の財政支援にも関わらず個人消費や企業の支出は軟調な結果となるなど内需の弱さが確認された。トランプ次期米大統領の関税引き上げ政策は自国及びグローバルに景気下振れリスクが意識され豪経済成長の重しとなることも意識される。これらを理由として10日(火)のRBA会合では声明文のタカ派文言の削除や次回2月会合での利下げが言及されるなどハト派な内容となる場合には市場が4月会合までにフルで織り込んでいいる▲25bp利下げが前倒されるとともに豪ドルは年初来安値を試す展開を想定したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/2~12/6)の値動き: (対ドル) 安値 0.6373 高値 0.6527 終値 0.6390
(対円) 安値 95.52 高値 98.02 終値 95.87



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。